

NEWSLETTER

International Lake Environment Committee

- 財団法人 国際湖沼環境委員会 -

このニュースレターには、英語バージョンもあります。

第10回世界湖沼会議における分科会テーマと座長募集のお知らせ

第10回世界湖沼会議の準備が着々と進んでいます。この第10回世界湖沼会議は、アメリカのシカゴにある、ミシガン湖に面するデポール大学の、リンカーンパークキャンパスにおいて、2003年6月22日から26日にかけて開催されます。ILECはこの会議を、IAGLR (International Association for Great Lakes Research) と共に開催します。今回の会議では、「大湖沼への地球規模の脅威: 環境の不安定性及び不測性への対処」がテーマとなる予定です。この会議についてもっと知りたい方は、PDFに納められた会議のチラシなどが入手可能な、IAGLRのホームページ <http://www.iaglr.org/conference/conference.html> をご覧下さい。

第10回世界湖沼会議は、ILECにとって、里帰りの意味を持つ会議となります。第2回世界湖沼会議は、1986年にやはりミシガン湖のほとりで開催されました。この会議では、大湖沼の有毒物質による汚染に焦点が当てられました。従って私達は、第10回世界湖沼会議が、このタイムリーなトピックに関して、1986年以降、どのような取組みがなされてきたのかを確認するため、特別セッションを開催する良い機会になるものと期待しています。全体として、第10回世界湖沼会議では、56の科学分科



会と、基調講演が行われる2つの全体会議が開催される予定です。

私達は、「大湖沼への地球規模の脅威」というテーマにより、多くの方々が参加されるものと期待しています。それぞれの湖沼についての効果的な管理計画は、その湖沼がある流域では完結しないため、過去数年の間に、"every lake is a global lake" というフレーズは、大いに理解を得られるようになりました。気候変動による影響によるものか、B領域紫外線の増加による影響なのか、外来種の侵入による影響なのか、或いは酸性雨の影響によるものかは定かではありませんが、湖の健康を脅かす、湖の流域外に起因する驚くほど多くの脅威が存在することを、私達は常に認識し

ておこななければなりません。こうした認識が、今回及び前回のニュースレターの中で議論されている、「世界湖沼ビジョン」策定の背景にあるひとつの動機なのです。

現在 ILEC は、分科会の座長を引受けてくださる方、並びに分科会のトピックに関する提案を受付けています。第10回世界湖沼会議企画委員会は、2002年8月31日迄に、分科会のトピックと分科会の座長を特定しようとしていますので、分科会のト

ピックと分科会の座長に関して、何かご意見・ご希望がありましたら、できるだけ早く ILEC までお知らせ下さい。本件及び会議に関するその他の事柄につきましては、chicago2003@ilec.or.jp にメールをお送り下さい。

第10回世界湖沼会議で発表される論文の要旨につきましては、2002年12月15日までに提出して下さい。参加登録申込み用紙、並びに論文作成・提出の手引きにつきましては、IAGLRのホームページ <http://www.iaglr.org>、並びに ILEC のホームページ <http://www.ilec.or.jp> で間もなく入手できるようになります。それでは、分科会への積極的な提案・参加と、2003年にシカゴでお目にかかれることを楽しみにしています。

今号のトピック

第10回世界湖沼会議 開催迫る！
 第3回世界水フォーラム&世界湖沼ビジョンについて
 ILEC 新職員、新科学委員の紹介
 2001年琵琶湖宣言ロゴマーク、キャッチコピー受賞者の紹介
 タンザニアでの会議レポート
 昆明での会議レポート
 第50回理事会と第46回評議会の報告
 チャバラ湖（メキシコ）の紹介
 第12回生態学琵琶湖賞の募集案内
 世界湖沼ビジョンのウェブサイト開設のお知らせ

第3回世界水フォーラム（WWF3）と世界湖沼ビジョン（WLV）

1. 世界水フォーラムの目的とあゆみ

(1) 世界水フォーラムの目的

世界水会議によって提唱された「世界水フォーラム」では、政府、専門家、NGO、一般市民などあらゆる人々が一同に会し、21世紀の国際社会における水問題の解決に向けた議論を深め、その重要性を広く世界にアピールすることを目的としています。

(2) 世界水フォーラムのあゆみ

第1回世界水フォーラム

63ヶ国から約500人が参加して、1997年にモロッコのマラケシュで開催されました。また、「マラケシュ宣言」が採択され、世界水ビジョンを策定することが決定されました。

第2回世界水フォーラム

156ヶ国から約5,700人が参加して、2000年にオランダのハーグで開催されました。また、「世界水ビジョン」が発表され、世界水パートナーシップからは、この「世界水ビジョン」を実現させるための「行動の枠組み」が示されました。

第3回世界水フォーラム

第3回世界水フォーラムは、2003年3月16日（日）から23日（日）までの8日間に亘って、京都、滋賀、大阪の3つの会場を結んで開催されます。京都会場では、閣僚級国際会議が開催されます。滋賀会場と大阪会場では、それぞれ滋賀デーと大阪デーが設けられ、特別セッションと分科会が開催されます。さらに、フォーラム期間中は、3つの会場で、水に関する様々な行事が開催されます。

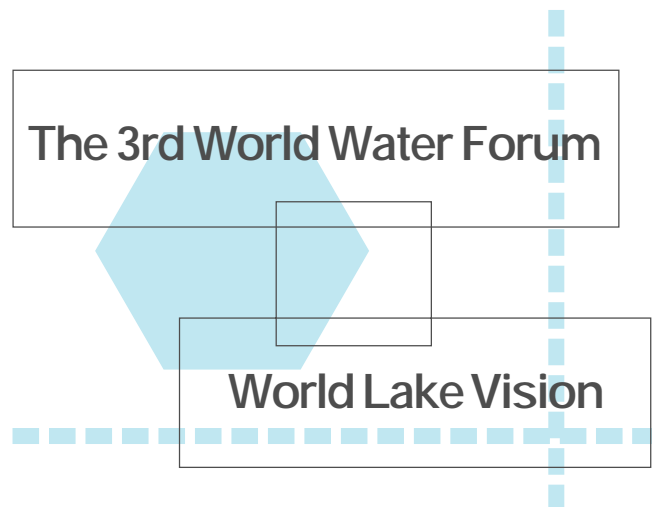
さらに、今回のフォーラムの成果は、「世界水行動報告書」、「閣僚宣言」、「分科会報告書」としてまとめられます。

2. ILEC、滋賀県、UNEP-IETCの取り組み

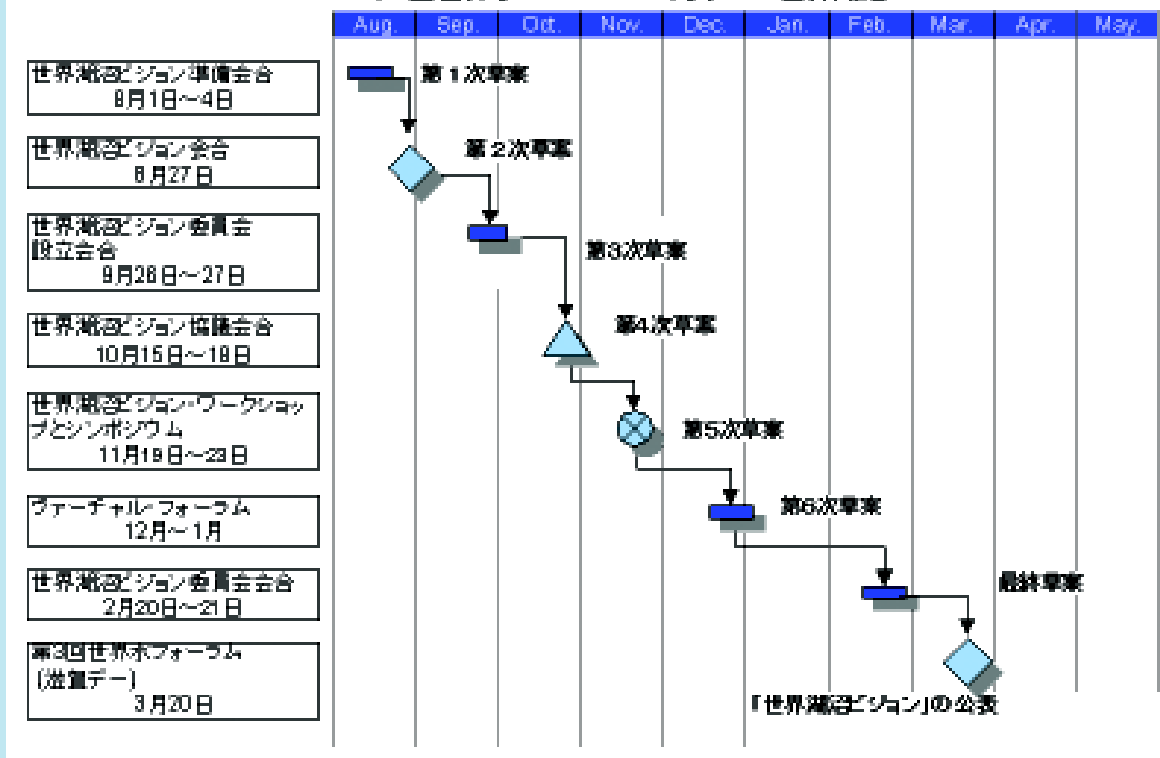
2003年3月20日の滋賀デー開催に向けて、滋賀県、ILEC、UNEP-IETCの三者により、下記の事業に共同で取り組みます。

3. 世界湖沼ビジョン（「World Lake Vision」）の策定と公表

第3回世界水フォーラムの成果の一つとして、「世界水行動報告書」が取りまとめられますが、この「世界水行動報告書」では網羅しきれない、湖沼の観点からの淡水資源問題解決と、世界の湖沼保全の取組みの一層の推進を図るため、滋賀県、ILEC、UNEP-IETCの三者が中心となり、「世界湖沼ビジョン」を策定し、提案することにより、滋賀デーでの活発な議論を通じて、今後の湖沼の保全と活用に取り組みます。



第3回世界水フォーラムへ向けての世界湖沼ビジョンロードマップ



ILEC 事務局新顔紹介

4月の人事異動に伴い、新たに事務局にいられた職員の方々をご紹介します。

氏名：古川 源二郎

役職：事務局長

前の職場：滋賀県琵琶湖環境部水政課

抱負：本年3月まで12年間に亘り、滋賀県庁水政課で琵琶湖にかかわる仕事をしてきました。ILECでは、世界の湖沼を対象に、様々な業務が展開されていますので、より一層広い視点から、一生懸命勉強して参りたいと思います。

氏名：高木 克則

役職：支援研修課長兼調査研究課長

前の職場：水資源開発公団関西支社管理部

抱負：ILECで皆様と仕事ができ、大変嬉しく思っています。ILECのさらなる発展のため、2年間一生懸命頑張ります。

ILECの新しい科学委員の紹介

ケニア人のEricオー・オダダ教授は、2002年6月25日にILECの科学委員会に加われました。オダダ博士は、地球化学での経歴があり、現在はナイロビ大学の地質学の教授です。オダダ教授の現在の関心は、地球規模の変化の調査研究です。オダダ教授は、START (global change SysTEM for Analysis Research and Training) の汎アフリカ事務局を率いています。STARTは、多くの学問分野にまたがる、地球規模の変化の調査研究について、地域からのアプローチを助成しています。オダダ博士は、多国籍かつ多くの学問分野にまたがって、東アフリカの湖沼の陸水学の調査を実施している、IDEAL (International Decade for The East African Lakes) プログラムの科学調整員でもあります。IDEALの使命は、1) アフリカの大湖沼に関する理解を深めることへの貢献 2) 環境問題を解決するために、アフリカの大湖沼に関する知識の移転を促進すること 3) 知識の交換と、地域における能力強化を促進するために、国際的な科学者と地域の科学者の間に、科学に関して協力関係を構築することです。オダダ博士は、1998年から2000年までの間、GEF (Global Environment Facility)の科学技術諮問機関のメンバーを勤めました。また、オダダ博士は、いくつかの地域プログラム、国際的なプログラムにも関わっています。地質学でのオダダ博士の専門知識により、ILECの科学委員会の専門知識の幅を広がるものと考えます。さらに、オダダ博士は、2005年にケニアで開催される、第11回世界湖沼会議開催に向けて、極めて重要な役割を果たしていただけるものと期待されています。



第9回世界湖沼会議「琵琶湖宣言2001」ロゴマーク・キャッチコピーの審査・選考結果について

1. 趣旨

2001年11月に滋賀県大津市で開催された第9回世界湖沼会議では、人類と地球の未来にとってかけがえのない湖沼を健全な状態に再生していくため、湖にかかわるすべての個人・組織が力を合せて努力を続けることの重要性が盛り込まれた「琵琶湖宣言2001」が採択されたところであります。

その精神の国内外への一層の浸透と、今後の世界湖沼会議への積極的な展開を図るため、広くロゴマーク・キャッチコピーを募集し、今般、応募作品の審査・選考をおこない「最優秀賞」および「優秀賞」を決定しました。

2. 審査・選考結果

■ 最優秀賞

○ ロゴマークの部

・安井 陵子さん (大阪府大阪市)



琵琶湖宣言 2001

○ キャッチコピーの部

・今北 紘一さん (滋賀県大津市)

『水キラキラ 魚イキイキ!』

■ 優秀賞

○ ロゴマークの部

- ・Valentina Khaydarova さん (ウズベキスタン)
- ・中山 祐二さん (滋賀県彦根市)
- ・Ma.Victoria P.Migo さん (フィリピン)
- ・齒黒 恵子さん (滋賀県蒲生郡日野町)
- ・小倉 裕美さん (滋賀県伊香郡高月町)

○ キャッチコピーの部

- ・藤本 公 さん (滋賀県長浜市)
- ・Lemeshko Natalia さん (ロシア)
- ・Van der Helm, Ruud さん (フランス)
- ・前野 晃男さん (京都府京都市)
- ・羽野 和幸さん (滋賀県大津市)

ガイドラインのPDF化について

ILECで発行している「湖沼管理についてのガイドラインブック」が、今回PDFファイルになりました。各巻とも章毎にPDFファイルに収められており、ダウンロードが簡単・便利です。このPDFファイルは、ILECのホームページから無料で入手できますので、是非次のURLにアクセスしてください。

<http://www.ilec.or.jp/eg/>

「世界の大湖沼の比較に関するシンポジウム (GLOW)」の報告

ビクター・ムハンディキ (2002年3月18日~20日 Arusha, タンザニア)

「第3回世界の大湖沼の比較に関するシンポジウム (GLOW)」が、2002年2月18日から20日までの3日間、タンザニアのアルサで開催されました。このGLOW は、Aquatic Ecosystem Health and Management (AEHMS) により継続的に開催されている、一連の国際的なシンポジウムのひとつです。このシンポジウムは、世界中の大湖沼の研究者と、大湖沼を抱える地域の相互交流と対話の促進を目的としています。GLOW の最初の2回の会議は、ジンバブエとアイルランドで開催されました。GLOW は、AEHMS、ビクトリア湖漁業研究プロジェクト (LVFRP) 及びビクトリア湖漁業機構 (LVFO) による共催でした。シンポジウムには、アフリカの大湖沼と他の大湖沼から、約80名の参加者がいました。ILECからは、科学委員の一人でもある中村正久博士と、私ビクターが参加しました。

GLOW における議論の中心は、アフリカの三大湖、すなわちマラウイ湖、タンガニーカ湖、ビクトリア湖についてでした。ローレンシア湖を含む、その他の大湖沼に関する発表も行われました。

アフリカの大湖沼に関しては、議論の主な話題は漁業とその管理でした。それは、湖に面する国々では、漁業が経済に重要な役割を果たしているからです。生物多様性を含め、その他に議論された話題は、気候変動が大湖沼に与える影響、大湖沼における食物網の構造、役割と評価、外来種の侵入、富栄養化、汚染と汚染が生態系に与える影響、そして大湖沼の統合管理でした。

シンポジウムの締めくくりにかかれたパネルディスカッションでは、科学 (研究) と管理を連結する必要性が強調されました。また、科学者がその研究成果 (管理に向けた行動を起こすための、適切な提案・アドバイス) について湖沼の管理者と、彼らが容易に理解できる言語で、意思疎通を図らねばならないとの意見がありました。地方と地域レベルにおける、科学者と湖の管理者間の、継続的な相互作用とネットワーク形成の必要性について認識しました。アフリカの大湖沼についての事業の多くは、ドナー主導型の事業であり、プロジェクト終了時には、その継続性の欠如から、短期の問題解決のための事業

にしかならないことが明らかになりました。こうした事業の持続可能性を確かなものにするために、湖に面する国々における現地主導 (型) の必要性が強調されました。研究はマーケット主導型であるべきだという提案に対して、東アフリカの研究者から強い反対意見が出されました。「西側諸国においては、生物多様性の問題は、マーケットを主導するものかも知れないが、アフリカにおいてはそれは当てはまらないことが多い。」と彼は指摘しました。

全体として見れば、ILECにとってこのシンポジウムは、アフリカの大湖沼について研究している科学者達と交流する絶好の機会でした。今回我々は、これらの研究者達と新たなネットワークを構築することができました。また、世界湖沼ビジョン策定に向けた取り組みを含めた現在の ILEC の活動、2003年に日本で開催される第3回世界水フォーラムの準備状況についても、シンポジウムの参加者達と情報の共有をすることができました。我々は、これらイベントに対するシンポジウム参加者の寄与を期待しています。



GLOW III 参加者

昆明での会議の報告

トーマス・バラートル (2002年3月25日～27日、昆明、中国)

今年3月下旬の3日間にわたって昆明において、中国の湖沼の富栄養化問題について議論するためのワークショップが開催されました。アジアとヨーロッパ諸国から50人の参加者が出席したこの会議は、アジアヨーロッパ環境技術センター(AEETC)と、雲南環境保護局(YEPB)が共同で開催したものです。

会議が開かれた昆明は、ティアンチ湖に臨む人口数百万の都市ですが、ティアンチ湖はとても富栄養化が進行しています。会議の参加者達は、ティアンチ湖の遊覧だけではなく、流域内の汚染防止事業のいくつかにも案内されました。この体験により、私達参加者は、ティアンチ湖の実情をよく理解できました。近年の保全に対する努力にもかかわらず、ティアンチ湖はひどい

状況です。湖に魚は生息しておらず、湖からの取水も危うい状況です。湖の一部は、まるで緑のスープを流したような状態で、ホテイアオイが繁茂しています。簡単に言えば、世界中の高度に開発された流域にある湖の状況を、このティアンチ湖が具体的に示しているのです。

この会議は、その雰囲気からも注目に値するものでした。使命感にあふれる気持ちから、多くの時間が生産的な議論に費やされました。会議の参加者には、ティアンチ湖の状況を改善するための最善の対処方法と、中国の湖沼の富栄養化問題に対する一般的な対処方法について、雲南環境保護局(YEPB)に提言することが求められていました。報告書の要約は、次のホームページで見ることができます。

http://www.aeetc.org/workshop_recommendations.pdf

提言の内容を要約すれば、すべての汚染源(点源、拡散源及び内部源)規制の必要性に力点を置いた、流域統合管理の実施を求めています。また、将来における特定の調査研究と協力についても、報告書の中で述べられています。

ティアンチ湖において、どのように状況が変化してきたかを知るのは、興味深いことだと思います。取り組むべき課題と、解決しなければならない問題は数限りなくあります。しかし、地方政府と国家政府と同様、海外の多くの団体が、この湖を救おうとして懸命に努力しています。こうした理由により、ILECは2003年に発表する"The Lake Watch 25"("25湖沼の監視")レポートに、このティアンチ湖も含めています。

1. 第50回理事会の報告

- (1) 日時
2002年5月27日午後1時より
- (2) 場所
ILEC 2階会議室
- (3) 理事会の概要
 - ・16名の理事・監事のうち、山崎理事長以下7名の出席、8名の委任状により開催された。
 - ・開会に先立ち、ILEC基金に多額の寄付をいただいた国際ソロプチミストアメリカ日本中央リジョン様と、株式会社滋賀ディーシーカード様の2団体に対して、感謝状およびヒロ・ヤマガタ氏による琵琶湖をデザインにしたポスターが贈られました。
 - ・平成13年度の事業報告および収支決算が審議され、満場一致で可決された。
 - ・辞任された大井評議員の後任として、合志評議員(独立行政法人国立環境研究所理事長)が新たに選出されました。

2. 第46回評議員会の報告

- (1) 日時
2002年5月30日午後1時半より
- (2) 場所
ILEC 2階会議室
- (3) 評議員会の概要
 - ・13名の評議員のうち、5名の出席、7名の委任状により開催されました。
 - ・第50回理事会において可決された平成13年度の事業報告と収支決算について、可決・同意されました。



チャパラ湖（メキシコ）

ハリスコ州にあるチャパラ湖は、北緯20度10分、西緯103度60分に位置の海拔1520mに位置しており、北米で最も古い構造湖のひとつです。湖面積1,112km²のメキシコで最大の湖であり、世界で最大の浅い湖であると言われています。湖周辺地域は、温帯及び亜熱帯に属し、気温は15度から32度で、平均的には24度程度です。この穏やかな気候のため、チャパラ湖は何百万という渡り鳥たちの休息の場所になっています。ハリスコ、ミチョアカン、グアナファト、ケレタロ、メキシコ及びナヤリットの各州にまたがる、流域面積54,400km²のレルマ - サンティアゴ川から、湖に水が流れ込んでいます。

何年間にも亘る流域や湖の過度の水利用により、湖岸線は大幅に後退し、平均水位は5m低下しました。現在の湖の最大水深は10.5m、平均水深は7.2mです。この浅さが、淡水湖沼の生態系に影響を与える、最大の物理的要因です。湖が浅くなったことにより、湖底に堆積している細かい火山性粘土が、ほぼ絶え間なく攪拌され、人間の活動に伴う各種の物質が、レルマ川と湖周辺の村から、湖に流れ込んでいます。

レルマ - サンティアゴ川流域は、メキシコにおける灌漑農地の1/8を占め、1,000万人以上の人々に水を供給しています。人口密度は118.7人/km²です。28,000を超える深層水井戸が、この流域内の38の地下水層に穿たれており、70%の帯水層が、過度に利用されているものと推定されています。

レルマ - サンティアゴ川流域は、メキシコにおける農産物（国民総生産の13%）と林産物の重要な供給元になっています。しかしながら、農業に必要な水は70%しか供給されていません。過去10年間に、5万ヘクタールを超える森林が、さらなる灌漑農地を確保するため、伐採されました。この灌漑農業の発展により、水の供給量の減少という犠牲を払って、



季節農業に関しては、その農業生産を増加させてきました。この地域内の工業生産は、国内総生産量の19%を占めています。

チャパラ湖での漁業は小規模なものです。経済的・伝統的に、湖周辺の暮らしに欠かせないものとなっています。漁師は、チャパラ湖固有のChirostoma (Charales)、鯉やナマズを求めて、毎日に湖に漕ぎ出します。主に獲れる魚はCharalesと外来種のティラピアです。過去10年以上に亘って、漁師の数は徐々に減っており、1987年には2,041人いた漁師も、現在では1,699人となっています。漁業に使用される漁具の数は、1987年に25,000であったものが、1999年には51,400になりました。過度の漁獲、漁獲規制の欠如、急速な湖水量の減少と水質の悪化が重なり、むしろ漁獲高の増加というよりも、漁獲高は減少しており、1990年には13,711tあった漁獲高も、1998年には3,484tにまで落ち込んでしまいました。

最終的に湖面の13%（135km²）を覆うようになった、湖面に浮かぶ巨大なホテイアオイの急速な成長と、1990年代初期における、青緑色の藻（類）＜アナペナ＞の異常発生の増加は、湖の富栄養化が進行していることを示しています。この浮遊するバイマスは、漁師や

水上交通、水鳥の食餌や水上スポ - ツの障害になりました。1993年に実施された、仕事のない人を雇って、人力によりホテイアオイを湖から除去する協同プログラムは、地域での活動が、成果を上げられることを証明しました。このプログラムの継続的な実施により、湖のホテイアオイは、かなりの程度まで除去できました。

今日、この地域の豊かな農業、漁業そしてレクリエーション資源は、急速に環境上の引き返し限界点に近づきつつあります。国際的、国家的、州政府による、NGOによる、さらには地方自治体による、時期を得た、思いやりのある介入だけが、この下向きの循環を止めることが可能であり、また、湖の再生過程を始めることができるのです。チャパラ湖を失うことは、想像もできない悲劇であり、地域の人々に計り知れない苦難をもたらし、メキシコ経済に打撃を与え、貴重な生態系を破壊することになるのです。この生態系の荒廃による影響は、今も至る所で見受けられます。このまま生態系の荒廃が続けば、この地域の次世代は負の影響を受けることになります。

悲観的な将来像と、克服不可能な数々の障害にもかかわらず、国際的、地方レベルでの環境に対する関心の高ま

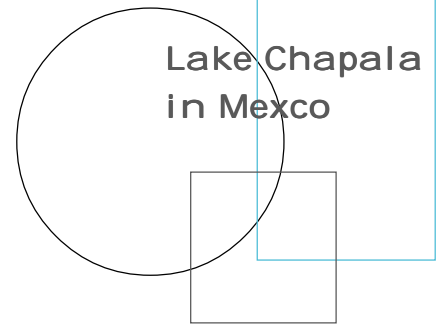
りにより、メキシコの国会議員や州議員達は、この生態系の破壊という問題に対して、真剣に取り組まざるを得なくなっています。州と、異なる社会経済グループ、農工連合体間の争いを持ち込んではいけません。驚くことではありませんが、現在の運動は、社会の各部門を代表する、62の湖を守ろうとする組織のゆるい連合によって進められているのです。これらの組織の中で、最も活動的で目立つグループは、過去15年間に亘ってチャパラル湖のために闘ってきた、"Sociedad Amigos del Lago de Chapala" というNGOです。このNGOは、日本の琵琶湖で行われたILECとの共同シンポジウムで、参加者に好評を博したプレゼンテーションを行いました。

Amigos del Lago とその他のグループは、個人と公共部門に対して、教育プロ

グラムと公共工事プログラム開始に向けた迅速な行動を求めて、そのプログラムを提案するために、共同で作業することに同意しました。この教育プログラムと公共工事プログラムは、水の配分、水の利用、レルマ川とチャパラル湖に流れ込む排水の三次処理に対処するためのより良く、より効率的で、より公平な方法につながるのです。そしてさらに、これらのプログラムは、漁業と農業における、より効率的で、持続可能な技術につながるのです。

SOCIEDAD AMIGOS DEL LAGO DE CHAPALA, A.C.

John Bragg
Member of President Board



第12回生態学琵琶湖賞の募集案内

< 概要 >

本年度より、琵琶湖賞及び琵琶湖賞受賞者の質をより一層向上させることを目的とし、その選考過程により時間を割くこととしたため、受賞者の発表と授賞式は、それぞれ来年の5月と7月になりました。

< 募集期間 >

平成14年7月1日～10月30日

< 賞の内容 >

(1) 対象・資格

(a) 原則として、個人を対象とします。

(b) 東アジア（ロシアの東部地域を含む）、東南アジア及び西太平洋地域（但し、オーストラリア及びニュージーランドを除く）に居住し、同地域における研究活動実績が高く評価される人となります。

(c) 生態学を中心に、その周辺を含めた科学分野において、水環境またはこれに関連するものを対象とした研究とします。

(d) 上記研究において、学術的見地から重要な研究成果をあげ、今後の研究の深化が期待できる人とし、水に関連する環境問題の解決の具体的な貢献につながる研究成果も評価の対象とします。

(e) 平成14年4月1日現在において、原則として50歳未満の人となります。

(2) 受賞

(a) 受賞者は2名とします。

(b) 1名につき賞状および賞金500万円を贈呈します。

< 受賞者の決定と授賞式 >

受賞者を平成15年5月に決定し、7月1日に授賞式を行います。あわせて、授賞記念行事を行います。

< 推薦書の送付先および問い合わせ先 >

【問い合わせ先】

滋賀県琵琶湖環境部環境政策課内
「生態学琵琶湖賞」事務局
〒520 - 8577 大津市京町四丁目1番1号
TEL: 077 - 528 - 3451 FAX: 077 - 528 - 4844
E-mail: de00@pref.shiga.jp

【送付先および問い合わせ先】

(財)国際湖沼環境委員会内
「生態学琵琶湖賞」担当
〒525 - 0001 草津市下物町1091番地
TEL: 077 - 568 - 4567 FAX: 077 - 568 - 4568
E-mail: biwakoprize@ilec.or.jp
Homepage: <http://www.ilec.or.jp/prize/j-index.html>

第3回世界水フォーラム関連の ILEC、滋賀県、UNEP-IETC の共同事業

事業名	開催期日	開催場所	参加対象者	事業の概要
淡水湖沼管理 ワークショップ	2002年 8月27日	ヨハネスブルグ (南ア共和国)	専門家、市民、NGO 行政	「世界湖沼ビジョン」の提案と議論 淡水及び湖沼管理を主テーマとし、ワークショップを開催。最終日には公開シンポジウムを行う。
	2002年 11月19日～ 11月23日	UNEPセンター 琵琶湖博物館 (草津市)	専門家、市民、NGO 行政	
21世紀の水環境 づくり国際会議・ 滋賀	2003年 2月22日～ 23日	滋賀県立文化 産業交流会館 (米原町)	専門家、市民、NGO 行政	「淡水資源の危機と解決への歩み (仮称)」を基本テーマに、4つのサブ テーマで報告と議論を行う。
淡水・湖沼セッ ション	2003年 3月19日	ピアザ淡海 (大津市)	専門家、市民、NGO 行政	環境上適正な淡水及び湖沼管理 (統合的水資源管理:IWRMと環境 上適正な技術:EST)をテーマに 報告と議論を行う。
	2003年 3月20日	WWF3会場 (大津市)	専門家、市民、NGO (WWF3参加者)	
世界湖沼関係知事・ 議長会議	2003年 3月19日	ピアザ淡海 (大津市)	国内外の湖沼に関わ る自治体の首長及び 議会の長	重要な淡水資源である湖沼の統合 的な管理について、報告と議論を 行う。また、湖沼の適正な管理の 重要性に関するメッセージを発信 する。
	2003年 3月20日	WWF3会場 (大津市)	上記参加者、専門家、 市民、NGO (WWF3参加者)	
世界湖沼ビジョン セッション	2003年 3月20日	WWF3会場 (大津市)	専門家、市民、NGO 行政 (WWF3参加者)	「世界湖沼ビジョン」の賛同を得る とともに、「世界湖沼ビジョン」を 活用した今後の取組みについて、 議論を行う。

世界湖沼ビジョンのホームページ開設について

滋賀県-ILEC-UNEP/IETCの三者では、第3回世界水フォーラムに向けて、湖沼の観点からの淡水資源問題解決と、世界の湖沼保全の取り組みの一層の推進を図るため、「世界湖沼ビジョン」を策定し、来年3月20日の滋賀デーでの分科会において、ビジョンを公表して行くこととしました。このため、世界湖沼ビジョン策定・発表についての情報発信・交換の場として、今回



ホームページを、下記のURLに開設しましたので、是非アクセスしてみてください。事務局では、今後このホームページを通じて、最大限情報発信に努めて参りますので、皆様よろしくごお願い致します。

ホームページアドレス：

<http://www.ilec.or.jp/WWF/jpn/>

2002年8月

ILEC事務局スタッフ一同

www.ilec.or.jp/WWF/jpn/



INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE

-事務局-

〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 (財)国際湖沼環境委員会
TEL. 077-568-4567, FAX. 077-568-4568, E-mail: info@ilec.or.jp